

Z 18-1753

1200500706539

日本組織培養学会
平成8年3月29日

会員通信
第88号

発行責任者
※佐藤 靖史 (東北大加齢研)
三井 洋司 (工技院生命研)
※〒980-77 仙台市青葉区
星陵町4-1
電話 022-717-8528
Fax 022-717-8533



§ 日本組織培養学会第69回大会最終案内

日本組織培養学会第69回大会を開催します。前回の会員通信のお届けが当初の予定から20日近くも遅れたため、予定していた発表・抄録の締め切り日程がきつくなり、ご迷惑をかけました。そのためか、当初の締め切り日には演題申し込みが5題しかなく、一時は学会にならないのではないかと危ぶまれました。その後50題を上回る一般演題が集まり、今度は1会場に収めるのに苦労しました。時間的にはやや密になりましたが、活発な会になることを期待しております。懇親会もお楽しみ下さい。5月の広島で皆様にお会いすることを楽しみにしております。

本会員通信と同時にお手元に届くはずの機関誌「組織培養研究」に記載されることは省略し、事務連絡のみを記します。

- 期 日 平成7年5月15日(水)～17日(金)
- 会 場 広島厚生年金会館(広島市中区加古町3-3)
082-243-8881(代表)
- 発表形式 口題発表のみとし、一般演題は、発表12分討論3分です。
スライドでお願いいたします。プロジェクターは1台です。

- 事前の参加申し込みについて
詳細は前号の会員通信でご案内の通りです。4月12日までに、前号の会員通信に同封されていた振込用紙にてお申し込み下さい。当日の参加登録は、1,000円高くなります。念のため。
特に、懇親会については船上で行いますので、参加人数を把握したいと思います。できるだけ前もってお申し込み下さるよう、お願い申し上げます。

○宿泊申し込みについて

詳細は前号の会員通信でご案内の通りです。

4月13日までに下記へ申し込み下さい。

〒730 広島市中区基町13-7 朝日ビル1階

㈱日本旅行広島支店 担当：桐山または宮本

電話 082-227-1090 ファクシミリ 082-228-7220

○大会事務局

〒734 広島市南区霞1-2-3

広島大学医学部総合薬学科井出研究室内

日本組織培養学会第69回大会事務局

Tel. 082-257-5290 井出

-5291 阿武（あんの）

-5292 大塚

-5293 田原

Fax. 082-257-5294

E-mail: baiyo@pharm.hiroshima-u.ac.jp（平成8年5月17日まで）

尚、大会期間中（平成8年5月14日～17日）は厚生年金会館内の大会本部にも電話が通じるようにします。外部からは、厚生年金会館の代表番号に電話し、交換台を通して大会本部へつないでもらいます。

§ 日本組織培養学会1996年度秋季公開シンポジウム予告

日時（予定）： 1996年12月6日（金）

- ・午前9時位から午後5時位まで
- ・シンポジウム後1～2時間の懇親会を予定

場所（予定）： 横浜アーバンカレッジ

- ・横浜市大の所有するセミナー室です。
（小山先生、梅田先生のご助力で手配していただいただけそうです。現在事務局に交渉中）
- ・横浜駅より徒歩10分
- ・懇親会もここで行う予定です（1～2時間）。

シンポジウムタイトル：

- ・発生・生殖工学の最近の進歩と話題
- －基礎から産業・医療への応用まで－

主 旨： 組織培養を研究の対象、あるいは手段としている学会員の方々にとってぜひ押さえておきたい周辺の研究分野の一つに発生・生殖を扱う細胞工学あるいは遺伝子工学の技術（ここでは発生・生殖工学とまとめて呼ぶ）とその研究の展開があると思われまます。

この研究分野は遺伝子導入技術、染色体操作技術、細胞培養技術など多彩な技術を集大成して、近年急速に進展してきた学際的な研究領域です。いわゆるトランスジェニック技術と遺伝子ターゲティング技術の進歩は目覚ましく、疾患遺伝子のみならず、発生、免疫、癌の発見競争にこれらの技術が組み合わされ、Nature, Scienca, Cellなどの一流雑誌をいつも賑わしていることはご存知のことと思われまます。

第一線の若手研究者にこの分野の研究の最近の進歩をご講演願う予定です。乞ご期待！学会員の皆様、特に若い方々、学会のみならず、産業界の研究者の方々、研究の明日の糧を探しに是非ご参集下さい。もちろん、学会員以外の方も大歓迎です。

現在までのところ講演を引き受けて戴いた演者の方々：

要匡（熊大医・遺伝発生）、権藤洋一（東海大・総合医学研）、里方一郎（新潟大医）能美健彦（国立衛生試験所・変異遺伝部）、平林真澄（ワイエスニューテクノロジー研）、星宏良（機能性ペプチド研）、松居靖久（東北大・加齢医学研・分子発生）、八木健（岡崎生理高次神経機構）、山本慧（慶大医・薬理）（以上アイウエオ順）の9名の先生がたです。

世話人：日本たばこ・生命科学研 西 義介

§ バイオジャパン '96国際シンポジウム

開催日時：1996年7月24日（水）～7月26日（金）

9:30 AM～5:00 PM

開催場所：東京国際展示場（有明）

主 催：(財)バイオインダストリー協会（JBA）

(財)ヒューマンサイエンス振興財団（JHSF）

(財)農林水産先端技術産業振興センター（STAFF）

登録料：

	全日程早期登録 (1996年5月31日以前)	全日程早期登録 (1996年6月1日以降)	旧登録
一般	65,000円	80,000円	30,000円
学校・国立機関 地方公共団体	35,000円	35,000円	15,000円

プログラム

基調講演

- (1) John Maddox(Editor, Nature, UK)
「バイオサイエンスー現状と展望」
- (2) Kenneth Lee, Jr.
(Co-Chairman, International Life Sciences Practice, Ernst & Young LLP, USA)
「バイオテクノロジーと21世紀」
- (3) 今堀和友(株)三菱化学生命科学研究所名誉所長
「バイオテクノロジー産業の21世紀へ向けての課題と展望」

I 健康関連セッション

- (1) 創薬のための新しいアプローチ
- (2) RNAの生物学
- (3) メディカルエレクトロニクス
- (4) ヒトゲノム解析
- (5) 先端技術と現代医療

II 食品関連セッション

- (1) 食品加工ー21世紀への展望
- (2) 遺伝子操作による有用植物の作出と実用化

III 環境関連セッション

- (1) 地球環境とバイオテク
- (2) 環境調和型プロセス・プロダクト
- (3) 生物資源ー保全と持続的利用

IV 情報関連セッション

- (1) 生体の情報処理
- (2) 情報科学による生物機能の解明
- (3) 生体高分子構造解析

IV 社会経済・規制関連セッション

- (1) 企業戦略①R & D戦略
- (2) 企業戦略②提携戦略
- (3) バイオ食品の安全性確保
- (4) 最近の審判決にみるバイオ分野特許の問題点
- (5) バイオの商品化

問合せ：バイオジャパン'96シンポジウム事務局

(株)アイシーエス企画 国際会議営業部 気付

〒103 東京都中央区日本橋2-14-9 加商ビル 2階

TEL. 03-3272-7981 FAX. 03-3273-2445

§ 日本電子顕微鏡学会第7回電顕サマースクール1996 「極微構造のダイナミックス解析技術」

日本電子顕微鏡学会では究極の形態研究のため、初心者から中堅までの若手研究者・技術者を対象にサマースクールを開いております。今年も第一線の講師が『極微構造のダイナミックス解析技術』の基本から最先端技術まで、その手技を、実際の体験に基づき解りやすく、明日からでも応用できるよう解説します。また、実技講習も予定しておりますので、実際の機器に手を触れて、体験学習出来ます。

2日半講師と実技の場で、あるいは懇親会場で、活発に意見交換をしていただくことは、明日への研究の活力を高めるのに役立つものと期待しています。今年も、日本電子顕微鏡学会の電子顕微鏡技術認定試験の問題とその解説をテキストに収録して、受験者の便宜を図っておりますので、お問い合わせの上、多数ご参加下さい。

実行委員長 瀬口 春通

会 期：1996年7月26日（金）・27日（土）・28日（日）

場 所：千里ライフサイエンスセンター

（新大阪駅から地下鉄で千里中央駅北出口すぐ）

参加費：日本電子顕微鏡学会会員30,000円（申し込みと同時入会も会員扱いとなります）、協賛学会会員35,000円、非会員40,000円、学生会員（上記からいずれも5,000円割引）、参加費にはテキスト代（定価9,000円）が含まれます。テキストには平成7年度日本電子顕微鏡学会技術認定試験問題とその解説も収録されています。

申込締切：1996年7月12日（金）

申込方法：申込用紙に所定の事項を記入の上、サマースクール事務局宛にお送り下さい。Fax 送信も受け付けます。お申込み受け付け後、振り込み用紙をお送りいたしますのでご入金下さい。入金を確認次第、受講票をお送りします。サマースクールの当日、会場受付で受講票をご提示いただくとテキストと名札をお渡しいたします。ご都合により申し込みの取り消しをされる場合

は送金手数料を差し引いてご返金いたします。7月6日(土)以降は返金
に応じかねます。ただし、後日テキストはお届けいたします。

申 込 先：高知医科大学第2解剖学教室内「電顕サマースクール」事務局
〒783 高知県南国市岡豊町小蓮
Tel. 0888-80-2301
Fax. 0888-80-2304

7月26日(金)

基調講演

物質科学と電子顕微鏡
細胞生物学の基礎としての顕微鏡技術

井村 徹(愛知工業大学)
石川 春律(群馬大学)

理想的固定法はこれだ

不安定酵素反応性保存のための固定法と
膜構造保存のための三重固定
マイクロウェーブによる能率的な化学固定と反応
Electron Energy Loss Spectroscopy (EELS)の
ための凍結置換固定
生体内超微形態と反応性保存に優れた
高圧凍結置換固定

平井 圭一(金沢医科大学)
森 吉臣(獨協医科大学)
江尻 貞一(新潟大学)
菅沼 龍夫(宮崎医科大学)

CCDカメラが拓く定量化への道

CCDカメラの原理
CCDカメラによる電顕像、電子回折の定量化

石塚 和夫(新技術事業団)
平賀 賢二(東北大学)

組織細胞内構成成分を観察する方法

切片上でのマイクロ生化学-酵素細胞化学
糖成分の分析-レクチン組織細胞化学
免疫組織細胞化学 Pre-とPost-embedding法

斎藤多久馬(自治医科大学)
村田 長芳(鹿児島大学)
長村 義之(東海大学)

7月27日(土)

凍結割断レプリカを用いた免疫組織細胞化学
凍結超薄切片による免疫組織細胞化学

藤本 和(京都大学)
藤本 豊士(群馬大学)

超顕微鏡による生命のイメージング

イメージングとはなにか?
バイオニアは語る・共焦点レーザー顕微鏡による
Caイオンの動態イメージング
光で見る分子の世界
原子間力顕微鏡今昔物語
水中で生きている生体分子を観る

臼倉 治郎(名古屋大学)
久場 健司(名古屋大学)
佐甲 靖志(東京大学)
猪飼 篤(東京工業大学)

TEMに優るSEM試料作製法

細胞内構造を見る O-D-O法	満嶋 明 (鳥取大学)
隠れたものを引っ張り出す 組織消化法	大谷 修 (富山医科薬科大学)

エネルギーフィルターTEMへの挑戦

メーカーの立場から

インコラムタイプ

Ω型エネルギーフィルター顕微鏡	日本電子
T型エネルギーフィルター顕微鏡	日立製作所
Ω型エネルギーフィルター顕微鏡	Carl Zeiss

ポストコラムタイプ

G I F	Gatan
-------	-------

ユーザーの立場から

エネルギーフィルター法と画像解析	進藤 大輔 (東北大学)
九州大学におけるΩ型ナノプローブ	
電子分光電子顕微鏡の物質科学への応用	友清 芳二 (九州大学)

これで試料作りの悪夢から解放される? 集束イオンビーム(FIB)装置

1.	日立製作所
2.	日本電子
3.	エイコーエンジニアリング
4.	セイコー電子工業

実技講習

7月28日(日)

トピックス講演

電顕的In situ hybridization法	中根 一穂 (長崎大学)
300万V超高压電子顕微鏡による新しい研究分野	森 博太郎 (大阪大学)
レトロウイルスの微細構造の観察	中井 益代 (大阪医科大学)
カーボンナノチューブの世界	飯島 澄夫 (NEC)
電子線結晶学	藤吉 好則 (松下電器)

§ 「ヒューマンサイエンス研究資源バンク」開設のお知らせ

対がん10ヶ年総合戦略の一環としてこれまで国立衛生試験所、国立予防衛生研究所が中心となってそれぞれ細胞バンク、遺伝子バンクを運営し、これら研究資源の供給を行って参りました。この度、対がん10ヶ年総合戦略の終了を機にこれら両バンクを発展的に改組し、下記の要領で財団法人ヒューマンサイエンス振興財団が研究資源バンク（略称：H S R R B）を開設・運営することになりました。

運営規程（抜粋）

- ・業務：厚生省の国立試験研究機関による支援とこれら機関との緊密な連携の下に、細胞遺伝子の研究資源の分譲（有償）業務及び分譲に関わる諸業務を行う。
- ・分譲対象者：国内外を問わず、産官学の生命科学研究に従事する研究者を対象とする。
- ・利用の範囲：基礎的・基盤的研究、安全性試験等各種試験に利用されることを原則とし、直接的な営利活動には利用できない。ただし試験等を業とする活動の場合はこの限りではない。なお、分譲された研究資源を、第三者に譲渡することはできない。

本バンクのご利用をお待ち致しております。保有細胞・遺伝子、分譲価格、分譲依頼方法などのお問い合わせは下記までご連絡下さい。

〒540 大阪市中央区法円坂1-1-43

ヒューマンサイエンス研究資源バンク

FAX: 06-945-2872

§ 学会の活性化に新しい息吹きを期待しています

会長 蔵本 博行

この会員通信が会員の皆様に届く頃は、日本組織培養学会の新しい役員が選出されている頃かと存じます。

日本組織培養学会は、組織培養研究の揺籃期から、この方面の指導的役割を担って発展して来た学会であります。一方で、様々な問題を抱えております。その大きな一つは、学会のあり方でありましょう。組織培養研究も、当初の意味合いから、現在では大きく細分化され、バイオ、バイオインダストリー、分子細胞学、遺伝子学、等々、in vitro研究を表面に出さない呼称で呼ばれております。そして、それぞれに専門的な研究者の集団が結成されています。このような現況にある時、私達の学会はどのような方向に向いて行くべきでしょうか。大所高所を見通した舵取りが、必要な時期に来ているのではないのでしょうか。

そのためにも、若い研究者の学会活動への参加が大いに期待されます。以前にも述べましたが、会員の年齢構成は、本邦での人口構成の傾向に比較して例外ではないようです。本学会の伝統の一つは、自身の研究を持ち寄って、老若の区別なく自由に議論することにあります。お仲間の若い研究者に主旨を伝えて下さい。積極的な参加を促して下さいよう期待しております。

新しい役員の方々には、新しい息吹きで本学会を運営して頂くことを期待しております。が、丁度今の時期は、会員一人一人にとっても本学会の将来について考えて頂く良い機会であろうかと存じます。(3月11日・記)

§ 会員通信欄

2nd Workshop on Neoplastic Transformation in Human Cell Systems in Culture :
Mechanisms of Carcinogenesisに出席して

岡大医学部・分子細胞研・細胞生物部門
難波 正義

1995年9月、シカゴで開催されたワークショップに呼ばれ、“Immortalization of normal human cells with either mutant p53 plus 4NQO or mutant p53 plus X-rays”について話した。ヒト培養細胞の癌化実験がむずかしい点は、正常細胞が不死化しにくいこと、すなわち、正常細胞は老化につよく運命づけられていて、増殖が停止することに原因があることを、イントロとして、ヒト正常細胞に変異p53を導入すると、染色体の変化がおこるが、不死化はしないこと、しかし、この細胞を4NQOやX線で処理すると不死化することを報告した。

この話に、Dr. Chopraからヒト細胞の老化は本当か？培地が不適當なだけではないか？自分は細胞の老化を信じない！という予想もしなかった質問を受け困った。彼は私の後の数人の演者に同じ質問をしつこく繰り返し、翌日の彼の話しを聞いてくれと自信満々であった。事実、彼は“Chopra et al., Growth and gene expression in diploid epithelial cell lines derived from normal human parotid gland, Differentiation 58: 241, 1995”にヒト耳下腺細胞の無限増殖性を報告している。しかし、翌日の彼の話しには手厳しい質問が続いた。

この会の全体の流れは、ヒト細胞の不死化、癌化に伴う、サイクリン、CDK、p53、p16などの細胞増殖関連遺伝子のかかわりについてのものが多かった。上に述べたように、ヒト細胞を化学発癌剤や放射線のみで不死化することは非常にむずかしい。そこで、外国の研究者はヒト細胞をとりあえずSV40やパピローマ遺伝子で不死化させ、さらにこの不死化した細胞を癌化させたる実験系を用い、これらの細胞の遺伝的変異をみいだそうと、きわめて現実的なアプローチでヒト細胞の発癌実験に取り組んでいる。日本でもこのように気楽にヒト細胞の発癌実験を始める研究者が増えることが望まれる。

また、ヒト上皮細胞を使つての仕事が増えたことである。皮膚、乳腺、前立腺、膀胱、肝、気管などに由来する上皮細胞の発癌実験の報告が相次いだ。

会も終わり近くなって、米国科学アカデミー会員のRuth Sagerが彼女の報告の後で、これだけヒト細胞の上皮の細胞の培養が盛んになってきているが、上皮細胞の培地の開発にNIHのグラントがないのはどうしてかと突如として強く訴え始めた。分子生物学者のSagerの発言に会場は一瞬静寂が漂った。私はこの場面に遭遇して、米国の研究者の基礎科学に対する考え方が出ていると思った。日本の組織培養学会の会員の方々もよくご存じのように日本でも培地の開発のような領域は忘れ去られている。そして、日本の偉い科学者がこのようなことを言ってくれたことを私は聞いたことがない。そして、ややもすれば培養細胞の仕事が日本で軽視される傾向があるのははなはだ淋しいことだと、シカゴからの帰途思った。

会長および幹事の選挙について

名誉会員 山田 正篤

” 黒田 行昭

日本組織培養学会の会長および幹事の選挙が始まろうとしています。他の学会でもいま同様の時期で、とくに臨床関係の学会では、会長選挙について自薦、他薦の郵便物が何通も届けられてきます。そのこと自体は会長選挙に違法ではなく構わないのですが、会長という権威を組織票を集めて獲得したいという姿勢がありありとしていて、あまり愉快なことではありません。また、本学会にこれまで殆ど発表もしていない人が組織票によって突然幹事に選出されるというおかしなことが行われてきています。学会の運営の要となる会長や幹事は、業績も行動力も、そしてこれまでの学会への貢献度も含めて、それぞれにふさわしい人を個人の考えで選べないものではないでしょうか。

学会が大きくなると、それぞれのグループができます。あるいは多岐の分野にわたる人員構成の学会では自らから派閥ができあがるかも知れません。ある学会では会の運営がスムーズにゆくように分野別に、たとえば医学と生物学、あるいは医学、薬学-歯学、農学というように会員数で割り振って、順番に会長を立てているところもあります。

日本組織培養学会も多くの分野の研究者から構成されています。その幅が広いために、本学会は医学研究者が主流であるにも拘わらず日本医学会に加入しておらず、また日本学術会議内でも、ある時は7部(医学)ではなく、生化学会、細胞生物学会、分子生物学会などとともに副会長担当のその他の部会に所属していました。

今回の選挙には間に合わないかも知れませんが、会長選挙に関して言えば臨床医学研究者、非臨床医学-生物学研究者の2グループに分け、代わる代わる会長を出すのもひとつの方法でしょう。会長にふさわしい人という意味で、事前に幹事会で複数の候補者を推薦し、選挙前に告知することを考えてもよいと思います。そのやり方で多くの会員に納得できる人が選ばれるのではないのでしょうか。もちろん、選挙はそれに拘束されることなく、誰に一票を入れても構わないのですが、繰り返しになりますが、会長や幹事にふさわしい人が選ばれることを期待しています。

編集後記

会員通信第88号をお送りします。ところで、今回をもちまして私の会員通信担当幹事としての任期が終了いたします。2年間、随分長いと感じましたが、これでやっと肩の荷がおろせます。最後に、担当中いろいろと不備な点がありましたこと、この場を借りまして心よりお詫び申し上げます。(Y. S.)